（様式５）

令和４年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－１－		
重点項目	学力の向上	
重点課題	①授業の水準を高める。 ②生徒がテスト等によって学力を自己分析し、主体的に学習を進めることができるよう指導する。	
現状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②課題をこなすことに終始し、テストによる学力分析と事後対策が不十分な生徒が多い。	
達成目標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数	②各種テストの見直しを行い、その後の学習計画を自主的に作成・修正し、実践できた生徒の　割合　（学習アンケート）
	各教科 年間２回以上	７０％以上
方策	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、３年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善をはかる。	○読解力・思考力・判断力・表現力等を育むような質の高いテスト作りに努める。 ○校内模試においてテスト解説授業を実施し、テストを見直す意識を高めるとともに、その後の学習の指針を示す。 ○テストの見直しにより、学習活動におけるＰＤＣＡサイクルの徹底を図る。
達成度	○各教科年間２回以上実施した。	○テストを見直す意識が「強くなった」または「強くなった教科もある」と答えた生徒84％ ○「テストでできなかった分野の復習を学習計画に取り入れ実践しようとしている」と答えた生徒67％
具体的な取組状況	《互見授業・教科別授業研究会》 １学期・２学期を通じて１５人の教員が「授業研究のための互見授業」を行った。特に１学期は学校訪問と併せる形で実施したため、互見授業の対象とならなかった教員もほぼ全員が授業を公開し、指導主事や他校の教員からの助言を受けることができ、有意義であった。いずれも授業実施後には、教科別の協議会や授業研究会を持ち、生徒の学力、学習実態について分析するとともに授業力向上に向けた指導法の検討を行った。	
評　価	A	《互見授業・教科別授業研究会》 今年度も計画通り互見授業を実施することができた。原則２回の互見授業後、またその他必要に応じて、各教科で教科別授業研究会が実施され、その概要が報告されており、生徒の主体的、対話的な深い学びを意識した授業方法の改善が検討されている。
	B	《テストの見直し、自主的な学習計画》 ＜１年＞テスト後に丁寧な見直しをしている教科は、数学(約76%)が３教科中、最も高く、過去３か年の中でも最も高かった。 ＜２年＞９月より１月の方がどの科目でも高くなった。 ＜３年＞見直しをしたり、その後の学習に取り入れている教科は数学、理科、英語が多い。
学校評議員の意見	《互見授業・教科別授業研究会》 互見授業は教師だけで見合っている。外部の視点も必要ではないか。学校評議員にも見られるようにしてはどうか。アクティブラーニングは将来的な学習の姿勢に関わり、重要である。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 テストの見直しは非常に有用である。丁寧な解説を行い、次回は自分の力で解けるように指導してほしい。昨年度の目標は８０％以上だったのに対し、今年度の目標は７０％以上であり、残念である。	
次年度へ向けての課題	《互見授業・教科別授業研究会》 近年本校でも若手教員が増えているが、互見授業を行うことはベテランにも若手にも授業力向上のためのよい刺激になるため、積極的な実施を続けたい。現１年生から実施されている新教育課程においては科目数の増加がある中で、現状通り３２単位で授業を編成しており、各科目においては３年間での単位数が概ね減少している。教科別協議会では、アクティブラーニングやＩＣＴなどの効果的な活用について検討するとともに、削減された時数の中でより効果的に指導を進めるため、指導内容の精選、３年間を見通した指導計画の立案、教科間連携のあり方などについて協議していく必要がある。	
	《テストの見直し、自主的な学習計画》 生徒にテストの見直しを行なわせるためには「週末課題として課す」、「解説授業を行う」などの外発的な動機づけも必要である。また、復習が活かされたと実感できる作問なども、見直しの動機づけになりうる。テストの見直しを通して、生徒が学習のＰＤＣＡサイクルを意識し、自らの学習計画を構築できるよう、担任や教科担当者が適宜具体的なアドバイスを行う必要がある。なお、新課程生徒より観点別評価が導入されているが、自らの学習状況を把握、調整し、計画的に学習に取り組む姿勢は、「主体的に学習に取り組む態度」として評価の対象になりうることにも留意する必要がある。	

評価基準　A達成した Bほぼ達成した C現状維持　D現状より悪くなった

（様式５）

<table>
<tr><td colspan="4">令和４年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－２－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">進路意識の高揚と進路希望の実現</td></tr>
<tr><td>重 点
課 題</td><td colspan="3">①自己の将来像に連なる進路意識を醸成し、進路希望の実現をはかる。
②第一志望をあきらめず、難関大学への進学をめざす意識を育成する。</td></tr>
<tr><td>現 状</td><td colspan="3">①全員が大学への進学を希望している。大学などと連携した探究的な学習活動・体験の機会を活用する工夫が必要である。
②自分の夢や希望を具現化するために、意欲的に情報を収集し活用する姿勢に欠け、進路選択が遅れる生徒が増加傾向にある。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達 成
目 標</td><td colspan="2">①　大学探訪・進路講演会に満足した生徒の割合</td><td>②難関１０大学＋国公立医学部出願した生徒の割合</td></tr>
<tr><td colspan="2">大学探訪　　…　９０％以上
進路講演会　…　９０％以上</td><td>難関国立１０大学と国公立医学部に出願した生徒の割合　…　５０％以上</td></tr>
<tr><td>方 策</td><td colspan="2">○大学生活を具体的にイメージさせるために、２学年の８月に「大学探訪」を行い、卒業生を招いて座談会を開く。3月には大学受験を終えた直後の卒業生、既卒生を招き、「先輩に学ぶ会」を行う。
○将来の社会的･職業的自立に向けた一人一人のキャリア発達を促すために１学年の生徒に対し進路講演会を行う。事前に希望を集約して要望の多い分野から講師を招き、１５分野以上の分科会を設置し実施する。</td><td>○面接指導や学年集会、および進路に関する行事を通して、早い時期から高い進路意識を持たせるよう指導する。また３学年では個別指導を強化し、生徒一人一人が志望大学の要求する学力に到達するように努める。
○ＳＳＨ事業等を通し探究的な学習活動・体験の機会を増やし、大学で何をするかについて具体的なイメージを抱かせる。</td></tr>
<tr><td>達成度</td><td colspan="2">・大学探訪　　９６．３％
・進路講演会　　９９．０％</td><td>・出願の割合　　５４．３％</td></tr>
<tr><td>具体的な
取組状況</td><td colspan="3">＜１学年＞
・社会の様々な分野で活躍されている方々を招いて、進路講演会を実施した。今年度は県外企業の方も多数お招きした。事前アンケートを参考に各分野から１５分科会を設定し、生徒は希望する２分野の講演を聴いた。
＜２学年＞
・コロナ禍により、活動の制約もあったが、８月に大学探訪並びに施設訪問を行うことができた。１７３名が　参加し、グループに分かれて東京大学駒場キャンパス見学・講義に参加した。
＜３学年＞
・学年集会・面接などを通して、一人一人の課題やそれぞれの大学合格までの学習プランについて意識するよう、担任や教科担当者から声かけを続けた。
・医学部志望者に対し、駿台の講師による入試対策講座の他、自治医科大学・富山大学の医学部説明会を開催し、参加した生徒は医学部や医師になることについて学んだ。
・全教科にわたって、受験まで大学別添削指導を行っている。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価</td><td>A</td><td colspan="2">《大学探訪》
・東京大学のみの見学となったが、生徒の満足度は高かった。
《進路講演会》
・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野（１５分野）の講師を招き、１０月上旬に開催した。</td></tr>
<tr><td>A</td><td colspan="2">《難関１０大学＋国公立大学医学部医学科出願》
・面接や授業など様々な場面で声かけを続けることで、不安になりやすい時期を支えた。多くの生徒が、大学へ何を学びに行くのかという具体的目標を持って学習を続けた。最終的に難関大を目指して出願した生徒の割合が高くなった。</td></tr>
<tr><td>学校評議
の意見</td><td colspan="3">《大学探訪・進路講演会》
・大学探訪は具体的な進路を決める上で重要である。各大学では少子化を受け高大連携を強化する傾向にある。進学希望の多い大学と連携を図ることも重要である。
・高大連携で医学部の話をさせていただいた。地域医療への貢献がキーワードで、それを担う学生を探している。富山の医療を支えるのは地元の学生である。
《難関１０大学＋国公立大学医学部医学科出願》
・難関大学や医学科受験者数は本校の目安である。結果の冷静な分析が必要である。
・日本の大学の世界ランキングが下がってきている。そのようなところを目標にしてよいのか。海外に出るというのも指導に入れるとよい。</td></tr>
<tr><td>次年度へ
向けての
課題</td><td colspan="3">《各大学との連携》
　各大学や機関から、魅力的な出張講義やセミナーの提案がなされており、効果的に活用して生徒に刺激を与えたい。既に多くの行事がある中で日程をどう調整していくかが課題である。
《進路の実現》
　教育課程の変わり目にあたり、入試をとりまく状況が非常に流動的な中で、生徒たちにどのような助言を与え、支援していくかが一層重要となる。最新の動向に注意を払いつつ、生徒の現状を的確に分析し、フィードバックしていく必要がある。</td></tr>
</table>

評価基準　A達成した Bほぼ達成した C現状維持　D現状より悪くなった

（様式５）

<table>
<tr><td colspan="4">令和４年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－３－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">読書指導・体力の向上</td></tr>
<tr><td>重 点
課 題</td><td colspan="3">①読書指導を充実させ、図書館利用の広報周知を行う。
②体力の向上に努めさせる。</td></tr>
<tr><td>現 状</td><td colspan="3">①生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。
②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達 成
目 標</td><td colspan="2">①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書の時間の数</td><td>②２年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合</td></tr>
<tr><td colspan="2">広報活動２０回以上
読書の時間年間１２時間以上（１・２年）</td><td>７０％以上</td></tr>
<tr><td>方 策</td><td colspan="2">○図書の広報刊行物を月一回以上発行する。
○読書の時間を計画的に確保し、探究型読書を実施する。また、年２回「読書会」を行う。
○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行を通して図書委員による主体的な活動を行い、図書館への理解を深めさせる。</td><td>○全学年、体育の授業時に、毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。
○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動などで意欲的なトレーニングに結びつける。</td></tr>
<tr><td>達成度</td><td colspan="2">広報活動２５回以上
読書の時間
１学年 普通科・探究科学科１４時間
２学年 普通科・探究科学科１４時間</td><td>２年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合
７７．５％</td></tr>
<tr><td>具体的な
取組状況</td><td colspan="3">《読書・広報活動》
・図書委員作成の「図書案内」を年１１回発行し教室に掲示した。
・司書作成の「Chubu Library図書館だより」を年１７回全生徒に配付した。
・図書委員による「本の福袋」を７月と１０月に作成した。
・図書委員会の活動や感想文・感想画の優秀作品を紹介する図書館誌「富山中部図書館」を３月に発行し、全生徒に配付する予定である。
《読書・読書運動》
・ＬＨの中に読書の時間を設定し、担任と生徒が同じ本を一緒に読み、意見を交わす活動を行っている。
・６月に読書・教養講座を実施した。講師は本校教諭の飯森壮太先生で、これまでの旅の経験や旅に関する文学作品、特に人生の転換期に影響を与えた村上春樹の作品に関する講演をして頂き、多くの生徒・教員が熱心に聴き入っていた。
・文化祭では、ビブリオバトルの決勝戦（２学年）、図書委員による企画（図書クロスワード）を実施、展示本（本の福袋・お勧め本）はその場での貸出を行い、図書活動の活性化を図った。
《体力の向上》
・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるように実施した</td></tr>
<tr><td>評価</td><td>B</td><td colspan="2">《読書指導》
・教職員の共通理解および図書委員の主体的な活動で、充実した図書活動を実施することができた。図書館利用者・本の貸し出し数は例年並みである。</td></tr>
<tr><td></td><td>B</td><td colspan="2">《体力の向上》
・更新率が例年に比べて低くなった。新型コロナウイルスの影響で運動する機会が少なかったことが影響していると思われる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">学校評議
員の意見</td><td colspan="3">《読書・広報活動》
・インターネット全盛の時代であり、本を開くことが面倒になってきている。本の面白さをどう伝えていくかが大事である。
・１編の本も読まない生徒がいることは問題である。本に触れあう環境作り、気軽に図書館へ立ち寄れる環境作りが重要である。
・忙しい本校生にどのように読書の時間を作らせるかが課題である。</td></tr>
<tr><td colspan="3">《体力の向上》
・体力の低下は懸念される。コロナ禍の影響があった可能性がある。
・受験を乗り切る最後の踏ん張りをきかせるためには健全な体が必要である。そのためにも是非今後とも体力の向上に励ませてほしい。新しい評価項目を研究してはどうか。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">次年度に
向けての
課題</td><td colspan="3">《広報活動・読書運動》
・図書館棟と教室棟が離れているため、生徒が図書館棟に足を運び、手軽に本を手に取ってくれるように授業での利用やＤの時間との連携等工夫を続けていく必要がある。
・読書の時間の目的を再度確認し、運営の仕方や本の選定を慎重に行う。</td></tr>
<tr><td colspan="3">《体力の向上》
・自己の体力、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。
・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。</td></tr>
</table>

評価基準　Ａ達成した Ｂほぼ達成した Ｃ現状維持　Ｄ現状より悪くなった

（様式５）

<table>
<tr><td colspan="4">令和４年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－４－</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td colspan="3">学校行事・部活動の充実</td></tr>
<tr><td>重 点
課 題</td><td colspan="3">①体育大会をより充実させる。
②部活動を充実させる。</td></tr>
<tr><td>現 状</td><td colspan="3">①体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また、体育大会を通じて、生徒たちは人間的にも大きく成長している。
②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は、学習と部活動を両立させるために、懸命に取り組んでいる。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">達 成
目 標</td><td colspan="2">①体育大会に充実感を持つ生徒の割合
＊大会終了後に実施する、生徒会によるアンケート</td><td>②部活動に充実感を得た生徒の割合
＊３年生全員を対象にした、８月下旬のアンケート</td></tr>
<tr><td colspan="2">８０%以上</td><td>７０%以上</td></tr>
<tr><td>方　策</td><td colspan="2">○体育大会の競技や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常にはかる。
○競技の練習や準備活動が行き過ぎないよう、適切な指導を行う。</td><td>○部活動への参加を積極的に促す。
○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。
○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。</td></tr>
<tr><td>達成度</td><td colspan="2">９５．８%</td><td>９８．１%</td></tr>
<tr><td rowspan="2">具体的な
取組状況</td><td colspan="3">《体育大会》
・３年ぶりのコロナ禍以前の体育大会に戻していくということで、生徒会執行部員、各団の団役員生徒、教員との間で競技や団活動について意見交換を積極的に行い、生徒主体の大会運営に努めた。</td></tr>
<tr><td colspan="3">《部活動》
・文化部、運動部とも感染症予防対策行い、活動場所を工夫して行った。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">評価</td><td>A</td><td colspan="2">《体育大会》
・感染症対策に留意し、競技練習・団活動を行うことができた。</td></tr>
<tr><td>A</td><td colspan="2">《部活動》
・各部の活動内容に合わせて感染症対策を工夫し、学習と部活動の両立を考えながら部活動を行った。全国大会・北信越大会で、好成績を収めた生徒が多かった。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">学校評議員の意見</td><td colspan="3">《体育大会》
・体育大会は久しぶりの開催となったが、その重要性が感じられたのではないか。
・コロナ禍の中で体育大会が実施できたことはうれしいことである。
・新しい体育大会とあるが、そのイメージや方向性はあるのか。</td></tr>
<tr><td colspan="3">《部活動》
・部活動での活躍が見られる。多くの成果を挙げており、とても頼もしい。
・この部分に限らず、「よかった」という評価のオンパレードになっている。新たな目標はないのか。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">次年度へ向けての課題</td><td colspan="3">《体育大会》
・今年の経験を活かし、伝統を大切にしつつ、今の時代にあう「新しい体育大会」を作っていく必要がある。
・そのために、必要に応じて競技種目内容や全体練習の活動時間、活動場所などを検討する。また生徒の安全面および感染症や熱中症などの健康面に配慮した活動を行う必要がある。</td></tr>
<tr><td colspan="3">《部活動》
・部活動を通して生徒が人間的に成長することを期待するとともに、活動時間の徹底、活動場所および部室等で、清掃や感染症予防対策をより徹底して行う。</td></tr>
</table>

評価基準　A達成した Bほぼ達成した C現状維持　D現状より悪くなった

（様式５）

令和４年度　富山中部高等学校アクションプラン　　－５－		
重点項目	「科学的思考力」と「自己発信力」の育成による「探究力」の伸長	
重 点 課 題	①探究活動を計画的に実施して、仮説設定力をさらに強化することで科学的思考力を高める。 ②さまざまな研修や学術交流を通して、対話することに重きを置いて自己発信力を高める。	
現 状	①これまで、探究科学科を中心に、野外実習や課題研究などのさまざまな探究活動を通して、科学的思考力の向上をはかってきたが、ＳＳＨ指定校として、普通科への普及も含めてより計画的に科学的思考力を育成する必要がある。 ②海外研修などの研修・実習や学術交流に参加する生徒が増えている。	
達 成 目 標	①－１ 野外実習、大学実習等に対するそれぞれの目標達成度 ＊各実習の事後に実施するアンケート ①－２　探究科学科、普通科それぞれ、課題研究における仮説設定の評価	②研修参加生徒に対する研修前後のアンケート結果の分析
	①－１　各９０％以上 ①－２　レベル３（目標）に到達した生徒の割合８０％以上	②研修に参加した生徒の事後の自己評価アンケートで、「自己発信力」が向上した割合 ７０％以上
方　策	○野外実習や大学実習では、実習の内容や方法について充分に打合せを行い、生徒が興味関心を抱き、積極的に参加できる工夫をする。 ○課題研究をルーブリックを用いて評価し、「探究力」の伸びをはかる。大学などとの連携をはかり、探究活動を充実させる。	○研修や学術交流に向けて積極的に自分の意見や考えを発信できる力を育てる工夫をする。 ○事後研修により、研修や学術交流を通して身につけた自己発信力の維持向上を図る。
達成度	①－１　「観察力」が向上　野外実習…９５％ 「科学思考力」が向上 富大薬学実習　…１００％ 東大研究室実習…１００％ 量子科学機構実習…９３％ ①－２ 観点Ｉ（仮説設定力）レベル３到達　７２％	②海外研修は、３月のオーストラリア研修に向けて準備を進めている。 （３月４～１２日実施）
具体的な取組状況	・野外実習は、立山自然観察実習を４０名ずつ２回に分けて、事前指導をした上で１泊２日で実施した。実施後は事後指導を行い、その成果をポスターにし、文化祭ではスライド発表した。 ・大学実習では、富山大学において２年普通科の希望者も含めて１６名が２講座に分かれて３日間の薬学実習を行った。その成果を文化祭でスライド発表した。 ・探究活動の評価に当たっては、生徒によるセルフ・アセスメント、複数の教員教員によるルーブリックを用いた評価、さらに生徒との面接の実施や「探究ノート」の評価を取り入れ、適正かつ客観的な評価を心がけている。	
	《海外研修》 ・アメリカ研修、中国東北育才学校との交流は、今年度実施せず。 ・オーストラリア研修は、今年度３月に実施予定。	
評価	B	・改善を図って立山自然観察実習を実施し、新たなものを含めて大学実習等を実施できたため。 ・教員による審査は概ね例年通りの結果だが、生徒によるセルフ・アセスメントでは、生徒の自己評価が例年より低く、「探究力」の伸長をもっと実感させられる指導が必要である。一昨年８３．８％、昨年度８２．６％、今年度５７．４％
	B	・オーストラリア研修をコロナ禍に配慮しながら実施する準備を進めている。現地についての学習に加えて、英語研修を複数回行い、事前研修を充実させている。 ・アメリカ研修の代替行事は実施できていない。
学校評議員の意見	《ＳＳＨ事業》 探究活動で、セルフアセスメントが例年より低くなった原因を分析し、今後に活かしてほしい。活動内容が多岐にわたっており、生徒も教員も準備・活動に多忙であると推測される。日頃の　学習とのバランスの取れた活動の工夫が大切である。	
	《海外研修》 オーストラリアのホームステイに期待している。研修後もZoom等を用いてホームステイ先の家族とのつながりを継続させてほしい。英語でのコミュニケーションが重要である。	
次年度へ向けての課題	《ＳＳＨ事業》 １年次のＳＳ基幹探究では「探究モジュール」を取り入れ、しっかりとした基礎作りに取り組んでいる。日常の教育活動に「探究モジュール」を位置づける必要がある。また、普通科へ普及する内容・方法を引き続き検討していく。的確に生徒の活動を評価し、評価の還元により生徒の「探究力」の伸長をはかる。	
	《海外研修》 「自己発信力」、「科学的思考力」、「リーダーシップ」などが向上する研修となるように、事前　研修を充実させる。参加者が研修で得た能力や体験を進んで今後の学校生活や将来に生かすことや、研修の成果を広く校内に伝えることが必要である。	

評価基準　A達成した Bほぼ達成した C現状維持　D現状より悪くなった